

『アエネイス』第7巻における「内乱」の勃発

——アッレクトの役割——

上 村 健 二

I 『農耕詩』第1巻エピローグとの関連

ウェルギリウスの『アエネイス (*Aeneis*, 以下 *Aen.*)』第7巻以降で描かれるトロイア人とイタリア人の戦いは、一種の内乱と見なしうる¹。なぜなら、両民族は将来融合して一つの国民(ローマ人)になる運命にある(*Aen.* 6.756-7, 761-2; 12.834-8)からである。もちろん、主人公アエネアスはアウグストゥスと重ね合わせて描かれ、この戦争はウェルギリウスと同時代の内乱と二重写しになっている²。

一方、『農耕詩 (*Georgica*, 以下 *Geo.*)』ではローマの内乱がしばしば描写・言及され、それに対する詩人の強い嫌悪感が示される。この点が特に顕著に現れた箇所として第1巻のエピローグ(498-514)を挙げることができる。すなわち、ウェルギリウスは、アウグストゥスによる内乱終結を妨げないようにと神々に祈った後、地上の戦乱状態について語る(505ff.)。

quippe ubi fas versum atque nefas: tot bella per orbem,
tam multae scelerum facies, non ullus aratro
dignus honos, squalent abductis arva colonis,
et curvae rigidum falces conflantur in ensem.
hinc movet Euphrates, illinc Germania bellum;
vicinae ruptis inter se legibus urbes
arma ferunt;

¹ Buchheit, 102ff., Fraenkel, 3-4, Horsfall(1995), 155.

² 例えば、7.317の *gener atque socer* はポンペイウスとカエサル (cf. 6.826-35) を連想させる。

Cf. Fraenkel, 3-4, Fordyce ad loc., Cairns, 96-7.

なぜなら、ここでは正・不正が逆転しているからだ。世界中にこれほど多くの戦争が、

これほど多くの形の罪業がある。鋤には何ら

ふさわしい敬意が払われず、農夫を奪われた耕地は荒廃し、

湾曲した鎌は錆つぷされて硬い剣となる。

こちらではエウブラテス川が、あちらではゲルマニアが戦争を起こし、

隣り合った都市どうしが協定を破って互いに

武器を取っている。

この部分が『アエネイス』後半の戦争と関連性を持ち、第 7 巻の内乱勃発の描写において想起されるのは上記のような理由から当然であり、従来から語句の対応などが指摘されている。とりわけ、農具に敬意 (honos) が払われないうという表現³は明確な対応を示している (Geo.1.506-8 ~ Aen.7.635-6)。その他、正義と不正の逆転 (505)、農地の荒廃 (506-7)、盟約破棄 (510) などの内乱に特徴的な要素は、『アエネイス』後半に描かれる戦争と共通している。

これに続く部分、すなわち内乱を戦車競走にたとえる比喻 (Geo.1.511-4)⁴ は『農耕詩』第 1 巻の締めくくりであり、ある種の (「暗い」「ペシシステイックな」と言われる) クライマックスをなす⁵。

saeuit toto Mars impius orbe,
ut cum carceribus sese effudere quadrigae,
addunt in spatia, et frustra retinacula tendens
fertur equis auriga neque audit currus habenas.

³ 内乱に対するウェルギリウスの嫌悪感を集約したものと言われる (Williams ad loc., Thomas ad loc., Mynors, ad loc.)。

⁴ 一般的には Geo.3.103ff.での戦車競走の描写、および Aen.5.144ff.の比喻との比較から論じられることが多い。Cf. Briggs, 25-8.

⁵ Briggs, 26, Williams ad 1.498-514, Thomas ad 1.512-4.

非道な⁶マルスが世界中で荒れ狂っている。

それはあたかも、四頭立て戦車がゲートを飛び出すと、
一周ごとに勢いを増し⁷、御者は手綱を引いても無駄で、
馬に運ばれ、戦車（の馬ども）は手綱（の制御）を意に介さないかのよう
である。

ここで強調されているのは内乱の制御不能性⁸である。すなわち、内乱（および、それを推進しようとする者たち）には、いったん動き出すと加速度的に勢いづき、歯止めが利かないという特質があるということである。

さて、この比喩には、内乱についての直前の記述と同様、『アエネイス』第7巻の戦争勃発の描写、特にラティヌスの置かれた状況に関連・対応があると考えられる。ラティヌスは、周囲から開戦を求められ（573-585）、最初は抵抗を試みるが（586-90）、結局は歯止めをかけるだけの力はなく（591-3）、神々に呼びかけて⁹言う（594）。

'frangimur' heu fatis' inquit 'ferimur'que procella!

彼は言う、「ああ、我々は運命によって碎かれ、嵐によって運ばれる。」

2つの受動形の動詞は、上に引用した『農耕詩』第1巻の最後の行（514）の行頭の *fertur* に対応している。続いて、ラティヌスはラティウムの臣民やトゥルヌスに警告を与えた後、館に閉じこもり、「事態の手綱を放した（制御を放棄した）」と言われる（600 *rerumque reliquit habenas*）。行末の

⁶ *impius* は内乱を示す語と見なされている（Page ad loc., Williams ad loc., Thomas ad loc.）。

Cf. *Geo.* 1. 468.

⁷ *addunt in spatia* はこのように解される（Servius ad loc., Page ad loc., Williams ad loc., Thomas ad loc.）。

⁸ Cf. Thomas ad 1.512-4, Mynors ad 1.512-4.

⁹ *inanis* (593) は折りが無駄であることを暗示する（Horsfall ad loc., Fratantuono, 221）。

habenas は、やはり『農耕詩』第 1 巻最終行 (514) の行末の habenas と位置的にも意味的にも一致している。

このように、内乱の勃発に抵抗しようと試みはするものの歯止めをかけるだけの力を持たず、結局は周囲の状況に流されるというラティヌスの姿には、『農耕詩』第 1 巻末尾の比喩との対応が認められ、『アエネイス』第 7 巻においても内乱が制御不能なものとなと見なされていると考えられる。以下の議論では、そうした制御不可能な状況が形成されてゆく過程が『アエネイス』第 7 巻でいかに描かれているかを、アッレクトの果たす役割を中心に考察する。

II アッレクトの性質

『アエネイス』後半ではトロイア人とイタリア人の戦争が描かれるが、このイタリア人はトロイア人にとって単なる打倒すべき敵ではない。前述のように、トロイア人とイタリア人の融合からローマ人が生まれ、イタリア人の武勇 (uirtus) がローマを偉大にする要素となる (Aen.12.827)。また、『農耕詩』第 2 巻のイタリア賛歌 (136-176) や農耕賛歌 (458-540) には、古のイタリア人の質実剛健な生活がローマを偉大にしたという思想¹⁰があり、『アエネイス』後半にもこれと呼応する表現が見られる¹¹。アエネアスが派遣したトロイア人の使者たちが目にした、体を鍛えるラティウムの子供たちの様子 (162-5) も、その一例である (cf. Geo.2.529-31)。

このようなイタリア人に盟約 (Aen.7.259-73 でラティヌスが約束したもの) の破棄という罪¹²を犯させ、戦争へと駆り立てるには、それにふさわしい力と刺激が必要である。これこそがアッレクトの役割であり、ここではまずその性質¹³を明らかにしたい。

『アエネイス』第 7 巻のモノローグでユノは、「トロイア人に対して天の力も海の力も使い尽くされてしまった (301)」、「もし天上の神々を動かす

¹⁰ Geo.2.532-5 など。Cf. 上村(1989), 58-9.

¹¹ Geo.2.472~Aen.9.607 など。

¹² Cf. Aen.7.595-7, 12.581.

¹³ 一般的には狂気 (furor) の象徴とされている (Williams ad 7.323ff.) が、ここでは別の面に注目する。なお、Heinze (183) はアッレクトを狂気ではなく不和の擬人化としている。

ことができぬなら、アケロン（冥界）を動かそう（312）」と言ひ、恐ろしい女神たちの住まい、暗闇の底からアレクトを呼び出す（324-5）。ここでこの女神の短い描写があるが（325-9）、注意すべきなのは「父ブルトン自身も、冥界の姉妹たちもこの怪物を憎んでいる¹⁴（327-8）」という点である。

アレクトは復讐の女神（Furiae または Dirae）の一人であり、ローマの Furiae はギリシアの Erinyes と同一視されているのだが（アレクト自身 447, 570 行で Erinyes と呼ばれる）、エリーニュエスには元々は個人名がなく、それぞれ性格が異なるものではなかったようである。それに対し、ウェルギリウスにおけるフリアエは、アレクト、メガエラ（12.846）、ティシボネ（6.555, 571, 10.761）の三姉妹であり、327-8 行の表現は、アレクトが他の 2 名とは異なる、それも何か更に忌まわしい性質を持つことを示唆する。

こうした観点からアレクトについての記述を見直すと、伝統的な復讐女神にはない面が付与されている¹⁵のがわかる。まず、325-9 では、アレクトが恐ろしい姿をしている¹⁶（328-9, 特に 329 の蛇 colubris）だけでなく、悲惨な戦争¹⁷や怒りや謀略（insidiae）や有害な罪といった忌まわしいものを好む（325-6）ことが示される。また、ユノはアレクトに対する言葉の中でその能力を列挙し（335-8）、「お前は心を一つにする兄弟を戦いのために武装さ

¹⁴ 571 行ではアレクトが *inuism numen* と呼ばれている。

¹⁵ ここでのアレクトの役割は罪人を罰すること（6.548ff.ではティシボネやその姉妹にそうした役割が与えられている）ではなく、争いを引き起こすことである（Fordyce ad 7.324ff.）。そこで、アレクトの特徴として、人間に狂気（*furor*）を吹き込むことが強調されることが多いが、この点は伝統的要素とも言える。すなわち、ホメロスにおいてもエリーニュスが人に迷妄を吹き込むと言われるし（『イリアス』19.87, 『オデュッセイア』15.234）、アイスキュロスの悲劇（『エウメニデス』325ff.など）でも復讐女神たちが狂気をもたらしめている。従って、アレクト独自の特色としては別の面を考慮すべきであろう。Cf. Horsfall, ad 7.323-40.

¹⁶ この点は伝統的要素であり、6.555-8, 570-2 のティシボネも鞭や蛇を含めて恐ろしい姿である。また、Geo.3.551-2 ではティシボネが擬人化された「恐怖」を伴っている。

¹⁷ *tristia bella* は内乱を示唆する（cf. 7.545）。7.408 ではアレクト自身が *tristis dea* と呼ばれる。また、8.29 でアエネアスが「悲惨な戦争」に心を痛めるのも、それが「内乱」だからであろう（Cairns, 100-1）。

せ（兄弟どうしを戦い合わせ）、憎悪によって家々を覆すことができ、お前は館に鞭と葬儀の松明を持ち込むことができる。お前には一千もの名前が、害なすための一千もの術策がある」と言う。鞭と松明は伝統的要素であるが、「術策（338 artes）」は上記 326 の *insidiae*¹⁸とともにウェルギリウスにおけるアツレクト独自の要素と思われる¹⁹。さらに、兄弟が戦い合う（335）ことは『農耕詩』第2巻でも内乱の特徴として挙げられている（Geo.2.496, 510）。

これらの点から、アツレクトには内乱という悲惨な状況を好む性質があり、その達成手段として、伝統的要素であり他の姉妹とも共通する恐ろしさ（蛇、鞭、松明など）とともに、策略をも用いることがわかる。この点は、後にユノがアツレクトに対して述べる「恐怖と欺き²⁰は十分だ」という言葉（552）にも符合するのである（詳しくは後述）。

さて、ユノはこうした前置きの後、アツレクトに、和平を粉碎し、戦争の種をまき、戦意を煽るよう命じる（338-40）が、そこで使われた幾つかの語句には農耕のイメージがあり²¹（338 *fecundam, concute*, 339 *sere*）、『農耕詩』を想起させるとともに、アツレクトを平和な田園世界に戦乱を持ち込むのにふさわしい存在として印象づけている。

¹⁸ *ars* や *insidiae* は *dolus* と同様に「策略」の意でしばしば用いられている（例えばギリシア軍の木馬の計略について *Aen.*1.754, 2.36, 65, 195, 310）。Cf. Horsfall, ad 7.477. 一般に『アエネイス』においては策略を用いることは大変なマイナスイメージを伴う。上村（1990）を参照。

¹⁹ ウェルギリウスにおける他の復讐女神について言えば、メガエラには具体的描写がなく、ティシボネにも策略を用いるという面はない（注 16 をも参照）。ホメロス以来の伝統的な復讐女神にもそのような面は現れないように思われる。

²⁰ ここでは「欺き（*fraus*）」を策略（*dolus*）と類似した概念と捉えておく（実際にしばしばほぼ同じ意味で用いられる）。なお、Geo.1.465 では *fraus* が内乱の一要素として挙げられている。Cf. Page ad 1.464, Mynors, ad 1.464-5.

²¹ Cf. Lyne(1989), 141-2, Horsfall ad 7.338. ただし *fecundam* には「術策に富む」という意味も当然含まれると考えられる。Cf. Servius, ad loc.

Ⅲ アッレクトによる煽動

アッレクトは上述のようにユノから、トロイア人とイタリア人の和平を破壊して両者を戦い合わせるように命じられているが、そのためには、盟約を結んだ責任者であるラティヌスにこれを破棄させなければならない。しかし、アッレクトは直接ラティヌスに働きかけるのではなく、周囲から圧力を掛けるという方法を選ぶ。これは、一つにはラティヌスがトゥルヌスやアマタのような狂気を帯びやすい性格²²ではないからであり、また一つには広範囲の人々を巻き込んで戦乱の規模を拡大し、戦意を高揚させるという意味があると思われる。つまり、アッレクトは段階を踏んでイタリア人の戦意を煽り立てるとともに、間接的にラティヌスに盟約破棄・開戦を強いるようとするのである。このやり方自体がアッレクトのいわば戦略である。以下で各段階について²³、アッレクトの用いる手段を中心に検討する。

第一に、アッレクトはラティヌスの妃アマタを駆り立てる。アッレクトはアマタの静かな (*tacitum*) 敷居に降り立つ (343)。この *tacitum* という語は、一つには「嵐の前の静けさ」を示すとも考えられるが、「静かに」という意味だとも解釈できる²⁴。すなわち、アッレクトの来訪が強襲ではなく、密かな襲撃であることを暗示しているのである。

アッレクトは髪のうちから一匹の蛇をアマタに投げつけ、その懐、胸の奥に滑り込ませる (346-7)。目的は、その怪異によってアマタが狂乱して (*furibunda*) 家全体を混乱させるようにすることである (348)。この蛇はアッレクトがアマタに植え付ける狂気 (*furor*) の象徴であり、恐ろしいもの

²² アマタとトゥルヌスについては、元々本人が持っていた性質をアッレクトが顕在化させたという解釈がなされることが多い (Williams ad 7.323ff., Thornton, 110-1, Lyne(1987), 13ff., 26, 68-9, Anderson, 67)。ただし、最近では(特にトゥルヌスについて)異論も出ている (Feeney, 167ff., O'Hara, 67-8, Horsfall ad 7.341-539)。

²³ ウェルギリウスがこの三段階をきわめて念入りに描いていることは、構成の入念さからも窺える。各段階が同程度の行数を持ち、それぞれが比喩を伴う。また、各段階の影響が後にラティヌスへの圧力という形で(今度は逆順で)現れる(後述)。Cf. Fraenkel, 145ff, Otis, 325-6, Horsfall ad 7.341-539.

²⁴ Servius, ad loc., Williams ad loc., Fordyce, ad loc.

(348 *monstro*) である。が、その一方でこれには術策、欺きを示唆する面もある。すなわち、この蛇は感触がないため (*attactu nullo*) 本人に気づかれず (350)、次々に姿を変える (351-3)。もちろん、*fallit* (350) という動詞²⁵ は本来欺きを意味するものである。このように、アマタに対してアッレクトが取った手段は、恐怖であると同時に欺き (策略) でもあると言える。

さてアマタは、最初のうちはラティヌスに、娘ラウィニアとアエネアスの婚姻の約束を撤回するよう言葉で嘆願するだけだが (354-372)、蛇の狂気が全身に行き渡ると (374-5)、都じゅうを抑制なく²⁶ (377 *sine more*) 荒れ狂う (376-7)。その様子はあたかも、鞭で駆り立てられる独楽のようである²⁷ (378-384)。アマタを駆り立てるのは狂気・恐怖であるが (cf. 375 *furiale*, 376 *monstris*, 378 *verbere*, 380 *habena*)、ここでもまた欺きを示唆する面が認められる。すなわち、アマタはバックスの神意を装って (385 *simulato numine Bacchi*) 娘を山の中に隠す²⁸ (385-7)。この偽装がアマタの意識的行動かアッレクトが強いた行動なのかは必ずしも定かではない²⁹が、いずれにせよアッレクトの影響下での (cf. 405) 策略³⁰だと言える。

アマタの狂乱はラティウムの母親たちをも巻き込み (392-403)、こうしてアッレクトは十分に (406 *satis*) 狂気を煽り、ラティヌスの意図と家全体を

²⁵ デイドを想起させる (1.688 *fallas*)。そこでは、ウェヌスの指示を受けたアモル (クビド) がデイドに恋の炎を吹き込むのだが、この行為は明確に策略 (*dolus*) と呼ばれている (1.673, 682)。注 38 をも参照。

²⁶ この点は内乱の制御不能性と符合する。

²⁷ この比喩にも、『農耕詩』第 1 巻末尾の比喩を想起させる点がある (380 *habena*, 381 *fertur, spatiis*)。ただし、ここでの *habena* は馬を抑えるための手綱ではなく、独楽を駆り立てるための鞭 (378 *verbere* と同じ) であり、方向性が逆である。

²⁸ この行為は罪悪とも狂気とも呼ばれ (386 *nefas, furorem*)、既に見た『農耕詩』第 1 巻エピローグにおける正・不正の逆転 (505) を示唆する。

²⁹ Heinze, 184-5, Fordyce ad 7.385, Feeney, 167.

³⁰ Aen.6.517-9 ではディオボスの霊が、妻であったヘレナが木馬の計略の際にバックス信仰の秘儀を装って (517 *simulans*) ギリシア軍に合図を送ったと語っている。

覆す(348 に対応) ことに成功する(407)。すなわち、ラティヌスのアエネアスへの約束の履行を阻止したのである。

第二に、アッレクトは、初めは恐ろしい姿を脱ぎ捨てて(415-8)、年おいた巫女カリュベの姿で、夜眠っているトゥルヌスのもとを訪れる(419-20)。神が人間の姿を借りて現れるのは叙事詩においてありふれたことであるが、既に見た 328 行でアッレクトの能力の一つとして様々な姿に自らを変えることが挙げられており、ここでの偽装も術策の一つと考えて差し支えないと思われる。

アッレクトはこの姿でトゥルヌスに話しかけ、トロイア人と戦うだけでなく、ラティヌスにも武力で圧力を加えるよう促す(429-34)³¹。しかし、この策は功を奏さず、トゥルヌスは予言者(カリュベ=アッレクト)を嘲笑する(435ff.)。その中でトゥルヌスは「そのような恐怖を捨てるな(438)」、「老年が予言者(であるお前)を誤った恐れによってだましているのだ(440-2)」と言う。これに怒ったアッレクトは恐ろしい正体³²を現し(445ff.)、トゥルヌスに松明(狂気の象徴)³³を投げつけ、胸に打ち込む(456-7)。つまり、「偽りの恐怖」を指摘されたアッレクトが、今度は真の恐怖を示したのである。トゥルヌスは恐怖に捕らわれ(458-9)、狂気によって荒れ狂う³⁴(460ff.)。その様子は、あたかも大釜の水が火に熱せられて沸騰する時のようである(462-6)³⁵。その結果、トゥルヌスはアエネアスばか

³¹ アッレクト(カリュベ)は 427-8 行で、「万能の(omnipotens)」ユノがこのことを伝えるよう命じたと言うが、所詮ユノは運命の成就を遅らせる力しかなく(cf. 315ff.)、トゥルヌスに目的(ラウィニアとの結婚)を逃げさせることはできない。その点でアッレクトの言葉は偽りとも言える(O'Hara, 65, 70)。なお、432(天の神々の偉大な力もそう命じている)も当然誇張である。

³² 蛇(447, 450)や鞭(451)を含む。

³³ Cf. Horsfall ad 7.456.

³⁴ saeuit(461)は既述の Geo.1.511 を想起させ、内乱を示唆する。sclerata にも同様な面がある。Cf. Horsfall ad 7.461.

³⁵ 沸騰した水はあふれ出し、自らを抑えきれない(465-6)。これもまた内乱の制御不能性と符合する。

りかラティヌスにも敵対する姿勢を示して（467-9）自分はトロイア人とラティウム人の両方に立ち向かうに十分（satis）だと言い（470）³⁶、ルトゥリ人たちがこれに従う（471-4）。このように、トゥルヌスに対しては、アッレクトは術策の後に恐怖によって目的を達したと言える。

第三に、アッレクトはラティウムの田舎の人々を煽動するのだが、この段階は、内乱を誘発するための、更に巧妙³⁷で手の込んだ策動となっている。

アッレクトは狩猟を楽しむアスカニウス（イウルス）らトロイア人のもとへやって来て地勢を探る際、「新たな術策によって（477 *arte nova*）」と言われている。これは、既にアマタとトゥルヌスに対して術策が用いられたこと、および、これから描かれる場面にも術策が用いられることを示す³⁸。

この段階でのアッレクトの目的はラティウムの牧人・農夫らの戦意をかき立てることだと考えられるが（481-2）、最初に狂気を吹き込む相手はトロイア人でもイタリア人でもなく、アスカニウスらの猟犬である（479-80）。これらの犬に追われる鹿の描写（483-502）は、読者を束の間の牧歌的世界（483-92）に誘い入れるが、鹿がアスカニウスの弓矢で傷つけられた（496-9）ことで情景は一変し、牧人らは怒りに燃えて集まってくる（503-510）。

この中で、アスカニウスの定かでない右腕には神³⁹が欠けていなかった（498）と言われるが、これは、アッレクトがアスカニウスの放った矢を獲物へと導いたのだと解釈できる。また、牧人らが手近な物を武器として不意に現れる（505ff.）のは、恐ろしい害悪（*pestis*）が静かな（*tacitis*⁴⁰）森に潜んでいたせいであり（505）、この *pestis* もアッレクトに他ならない。アッレクト

³⁶ このような豪語は、トゥルヌスがアマタ同様十分に（cf. 406）煽り立てられたことを表すように思われる。

³⁷ Cf. Anderson, 68.

³⁸ Williams ad loc. なお、前述のデイドに対する策略も *novas artes* と呼ばれている（1.657）。注 25 を参照。

³⁹ 男性形（*deus*）が使われているが、アッレクト自身を指すと解しうる（Servius ad loc., Williams ad loc., Horsfall ad loc.）。

⁴⁰ 既述のアマタの敷居（343 *tacitumque...limen*）と共通している。

はここでラティウム人たちに直接狂気を吹き込んでいる面もあるが、全体としてはアスカニウスに鹿を傷つけさせるという策略が描かれていると言えよう。

次に、アッレクトは害なす好機 (511 *tempus nocendi*) を捕らえて、自ら戦闘の合図を吹き鳴らす (511-4)。この *nocendi* は前述の「害なすための一千の術策 (338 *mille nocendi artes*)」を想起させるものであり、害なす好機を捕らえて牧人の合図を鳴らすことは術策を示唆するように思われる。ただし、アッレクトの吹き鳴らした合図は冥界の音であり (514)、恐怖を引き起こすものである (515 *contremuit*, 518 *trepidat*, 519-20 *bucina...dira*)。ここでは策略と恐怖が一体となっているようである。

トロイア人、ラティウム人の双方が戦列を整え (523)、もはや田舎の争いではなくなってしまう (524ff.)。遂に小競り合い (まだ正式な開戦はしていない) の中で最初の犠牲者が出るが、若者アルモの死 (531-4) と、平和のため中央に進み出たときに殺された「きわめて正しい (536 *iustissimus*)」⁴¹、家畜と農地で「きわめて裕福な (537 *ditissimus*)」老ガラエススの最期 (535-9) は、この戦いの残酷さ、非道さを印象づける⁴²。つまり、平和な田園世界を破壊するものとしての内乱の特徴が現れているのである。

このように、アッレクトはイタリア人を煽動するのに、恐怖 (狂気を植え付けること) と欺き (策略) を、ある時は混ぜ合わせて用い、ある時は使い分けている。こうした巧妙なやり方が『アエネイス』におけるアッレクトの特性であり、それを通じて内乱という非道な戦争を勃発させるのにふさわしい神格として描かれているのである。

IV 煽動の結果

アッレクトはユノとの約束を果たし、意気揚々と報告に戻る (540-4)。アッレクトは「悲惨な戦争で不和 (*discordia*)⁴³ が達成された」と述べた (545) 後、反語を用いて「彼ら (トロイア人とイタリア人) が友好を結び、盟約を交わすよう命じてごらんなさい」と言う (546)。ここで主張されてい

⁴¹ 最初に引用した *Geo.*1.505 に示された正・不正の逆転という内乱の特徴に符合する。

⁴² Williams ad 7.511ff., Di Cesare, 131-2.

⁴³ 内乱を示す語とされる (*Geo.*2.496, *Aen.*8.702)。Cf. Horsfall ad 7.545.

るのは事態の不可逆性⁴⁴である。つまり、もはや事態を元に戻すことはユノにも不可能だということである⁴⁵。

これに加えて、アトレクトはユノに、近隣の諸都市を巻き込んで戦線を拡大させようと申し出る（549-51⁴⁶）が、ユノはこれを制止し、「恐怖と欺き⁴⁷は十分だ（552 *terrorum et fraudis abunde est*）」と言う。「十分」の意味は、一つには当初の目的が既に達成されているということ（553-6）、一つにはこれ以上アトレクトが跳梁することがユピテルの不興を買うおそれがあり、かえってユノにとって不都合だということ（557-8）であろう。しかし、私はここでもう一つ別の意味が示唆されていると考える。すなわち、イタリア人が既に十分に⁴⁸煽動された結果、これ以上の刺激（特にアトレクトの恐怖と欺き、すなわち狂気と策略によるもの）を加えなくとも事態は自ずと進行してゆく⁴⁹、ということである（アトレクトの主張する不可逆性とも符合する）。この点は、アトレクトが冥界へ去った後の場面（572ff.）から裏付けられる。

572-3 行でユノは「戦争に最後の手（仕上げの一筆⁵⁰、*extremam... manum*）を加えた」と言われているが、これは直後に描かれる事柄（573-600）を指すものではない。なぜなら、ユノは 620 行で初めて地上に降りたように描かれており⁵¹、それまでは直接的な介入はできないはずだからである。従って、以下の場面はアトレクトによる煽動の結果である。つまり、アトレク

⁴⁴ Horsfall(1995), 161.

⁴⁵ Servius ad loc.

⁴⁶ アトレクトは「田園じょうに武器（戦い）を撒き散らそう」（551）と言うが、これも農耕のイメージを伴う（339 に対応）。

⁴⁷ Horsfall (ad 7.552) はこれがアマタに対する蛇とトゥルヌスに対する偽装における欺きを指すと言うが、これまで述べてきたようなアトレクトによる策略全般を指すと捉えることが可能である。なお、Servius (ad loc.) は、*fraus* が鹿を傷つけたことを指すと解している。

⁴⁸ Cf. 406, 470.

⁴⁹ Cf. Heinze, 192.

⁵⁰ 美術作品になぞらえた表現と解されている (Servius ad loc., Williams ad loc., Fordyce, ad loc.)。アトレクトの *ars* をユノが仕上げるとも言えよう (Putnam, 112)。

⁵¹ *tum* に注意。Cf. Horsfall ad 7.620.

トは既に地上から去ったにもかかわらず、その影響で事態（ここでは特に、正式な開戦を求める動き）は間断なく進行するのである。

アッレクトによる煽動と同様に、この場面も三段階に分かれているが、順序は逆になっている。第一は牧人たちであり、都に前述のアルモとガラエススの死体を運び込んでラティヌスに訴える（573-6）。第二はトゥルヌスで、この殺害に対する告発の中で、恐怖を（578 *terrorem*⁵²）増幅させ、自分がトロイア人と逆に王国から閉め出されていると主張する（577-9）。第三は、アマタとともにバックスの信女となって狂乱している女たちの家族の者たちであり、あちこちから集まってきて執拗に戦いを求める（580-2）。一同は前兆や神意に反して言語道断な戦争を要求し、競ってラティヌス王の館を取り囲む（583-5）。

このように、アッレクトによる煽動の結果は、ラティヌスに対して開戦を求める者たちの圧力という形に収斂する⁵³。ラティヌスは、打ち寄せる波に耐える不動の岩のように抵抗する（586-90）が、それも一時的である。彼らの盲目的な意図⁵⁴に打ち勝つ力は与えられず、事態は苛酷なユノの思惑通りに進行する（591-3）が、この記述も、ユノが未だ何もしなくても事態が進んでいることを示している。するとラティヌスは、既に見たように、「ああ、我々は運命によって碎かれ、嵐によって運ばれる」と嘆き（594）、ラティウム人やトゥルヌスにいずれ罰を受けることになる⁵⁵と警告（595-7）した後、館に閉じこもって事態の手綱（制御）を放棄する（600）。

このラティヌスの描写が『農耕詩』第1巻を締めくくる戦車競走の比喩と対応関係を持つことは既述の通りである。アッレクトによる煽動で今や歯止めの

⁵² 恐怖を起こさせるのはアッレクトの役割だったが（552）、今やアッレクトがいなくても、これに煽り立てられたトゥルヌスがその役目を引き継いでいるのである。

⁵³ Fraenkel, 7, Horsfall ad 7.586-90.

⁵⁴ *caecum...consilium*（591-2）の解釈は分かれているが、このように解するべきと思われる。

Cf. Horsfall ad 7.591.

⁵⁵ （イタリア人側ではあるが）自らの血で罪を償うという点では *Geo.*1.501-2 を思い起こさせる（ただし、先祖の罪を償うという思想は現れていない）。596 行にも *nefas, triste* という内乱を示すキーワードがある。

利がなくなった内乱（ないし、それを推し進めようとする者たち）は制御不可能であり、狂気を植え付けられたトゥルヌスらイタリア人はラティヌスに耳を貸さないのである（cf. Geo.1.513-4）。

さて、ラティヌスは宣戦布告、すなわち戦争の門⁵⁶を開くよう要求されていた（Aen.7.616-7）が、手を触れることを拒否してまたも責任回避し（618-9）、代わってユノが自らこの門を手で押し開く（620-2）。この行為こそが先述の「最後の手（仕上げの一筆）」であると思われる（573 *manum*～621 *manu*）。この門に関する描写は、正式な開戦を表すだけでなく、『アエネイス』における戦争をウェルギリウスと同時代の内乱と結びつける⁵⁷点で重要である。しかし、ユノによる強引な開門は、アッレクトの巧妙な術策とは対照的であり、内乱が本格化するのにもはやアッレクトの働きが不要となっている⁵⁸ことを示すものと思われる。

V 結び

以上のように、ウェルギリウスは『アエネイス』第7巻における「内乱」の勃発を『農耕詩』（特に第1巻エピローグ）を想起させる形で描き、その非道さと制御不能性（十分に刺激を与えられると歯止めが利かなくなる）を強調している。そうした状態にまでイタリア人を煽り立てるのがアッレクトの役割であり、その手段として、復讐の女神でありながら、恐怖（狂気を植えつけること）に加えて欺き（策略）をも用いるのがアッレクトの特性（ウェルギリウスの独創）である。これによって、トロイア人と融合して偉大なローマを形成すべきイタリア人が内乱という忌まわしい事態を引き起こすという筋書きが可能になったのだと思われる。

⁵⁶ 617行では *tristis...portas* と呼ばれる。注17を参照。

⁵⁷ Williams ad 7. 572ff.

⁵⁸ アッレクトは549-51行で近隣の諸都市を戦争に巻き込もうとユノに提案して退けられたが、実際、アッレクトが噂（549）による策動を行わなくとも、戦争の門が開いただけで近隣の諸都市の参戦は実現している（629-31）。

ウェルギリウスのテキストとしては OCT (ed. R.A.B. Mynors) を用いた。

参考文献

- Anderson, W., *The Art of the Aeneid*, Eaglewood Cliffs, 1969.
- Briggs, W.W., *Narrative and Simile from the Georgics in the Aeneid*,
Leiden, 1980.
- Buchheit, V., *Vergil über die Sendung Roms*, Heidelberg, 1963.
- Cairns, F., *Virgil's Augustan Epic*, Cambridge, 1989.
- Di Cesare, M., *The Alter and the City*, New York, 1974.
- Feeney, D.C., *The Gods in Epic*, Oxford, 1991.
- Fordyce, C.J., P. *Vergili Maronis Aeneidos libri VII-VIII*, Oxford, 1977.
- Fraenkel, E., *Some Aspects of the Structure of Aeneid VII*, JRS 35(1945),
1-14.
- Fratantuono, L., *Madness Unchained*, Lexington, 2007.
- Heinze, R., *Virgils epische Technik*, Berlin, 1915³.
- Horsfall, N. (ed.), *A Companion to the Study of Virgil*, Leiden-New York,
1995.
- , *Virgil: Aeneid 7, A Commentary*, Leiden-Boston-Cologne, 2000.
- 上村健二、「ウェルギリウス『アエネイス』——maius opus の解釈をめぐつて——」、『西洋古典論集』VI (1989)、53-75.
- 上村健二、「『アエネイス』におけるニススとエウリュアルス——dolus an uirtus をめぐって——」、『西洋古典論集』VIII (1990)、43-54.
- Lyne, R.O.A.M., *Further Voices in Vergil's Aeneid*, Oxford, 1987.
- , *Words and the Poet*, Oxford, 1989.
- Mynors, R.A.B., *Virgil, Georgics*, Oxford, 1990.
- O'Hara, J., *Death and the Optimistic Prophecy*, Princeton, 1990.
- Otis, B., *Virgil: A Study in Civilized Poetry*, Oxford, 1964.
- Page, T.E., P. *Vergili Maronis Bucolica et Georgica*, London, 1898.
- Putnam, M.C.J. *Virgil's Aeneid: Interpretation and Influence*, Chapel Hill,
1995.
- Thilo, G. and Hagen, H., eds. *Servii Grammatici Qui Feruntur in Vergili*

Carmina Commentarii, Leipzig, 1878-1902.

Thomas, R.F., *Virgil, Georgics*, Cambridge, 1988.

Thornton, A., *The Living Universe*, Leiden, 1976.

Williams, R.D., *The Aeneid of Virgil: books 7-12*, Basingstoke-London, 1973.

———, *Virgil: The Eclogues and Georgics*, New York, 1979.